

幼稚園の4歳児クラスにおける話し合いの展開

－ 合意形成過程における保育者の関わり －

杉 山 弘 子*

Speech Activities of 4 Years Old Children in a Kindergarten
－ Children's Agreement and Teacher's Advice in the Process －

Hiroko Sugiyama

本研究の目的は、幼稚園の4歳児クラスにおいて毎月同じテーマで行われる話し合いを年間の3つの時期において観察し、合意形成過程の変化を保育者の関わりとの関連で明らかにすることである。3つの時期をたどると、保育者の働きかけがより間接的になる一方、子どもがより自発的積極的に合意形成過程に関与するようになっていくことがわかる。話し合いにおいて意見交換が見られるかどうかは、保育者が意見を募るかどうかによるところが大きいこと、また、意見を募る際の言葉かけの内容が子どもの意見の内容に影響することが考えられる。このように、保育者の働きかけに大きく依存しながらも、4歳児クラスの子どもたちは、合意形成を目標として意見を言うことができることが示された。また、保育者の進め方に依存してはいるものの、保育者の意見を受けた行動の調整だけでなく、他児の意見を受けた行動の調整が可能になっていくことが示唆された。

キーワード：4歳児クラス、話し合い、保育者の関わり

<問題>

幼稚園や保育所などの集団生活の場において、子どもは仲間との様々な関わりを経験している。中でも自分の意見を他児に伝え、他児の意見を聞きながら合意を形成することは、その時の活動の継続と発展に関わるだけでなく、社会性の発達にとって意味のある経験と考えられる。合意形成の機会は、子ども同士と一緒に活動する中で生まれることもあれば、グループやクラスでの話し合い活動として保育者によって設定されることもある。こうした場面での子どもの行動は年齢とともにどのように変化するのであろうか。

礪波（2003）は幼稚園年少児、年中児、年長児がそれぞれ2人で1枚のぬり絵を選択するまでの共同意思決定過程を検討している。その結果、年齢が上がるにつれて、自他の意図調整のために、自己の意見のみでなく他者の意見をも考慮にいれたより積極的な交渉を行うようになることが明らかになったとしている。では、多人数による合意形成が目指されるクラスでの話し合いにおいても、同様の変化が見られるのであろうか。

2011年3月7日受理
* 尚綱学院大学 教授

杉山（2008a）が観察した幼稚園の3歳児クラスにおけるおやつ作りのメニューを決める話し合いでは、保育者の進行で、子どもが案を出し、案の中から各自が1つを選び、選択者が1ないし0の案を削ることを繰り返し、最後は多数決で決められていた。子どもは案を出すとともに、他児の出した案をも選択の対象とし、意見を変えながら1つに決める過程に参加している。また、杉山（2009a）は、別の3歳児クラスで、テーマは同じであるが保育者の進め方が異なる例を分析している。ここでは、保育者が1人ずつ全員を指名して子どもの意見を集約し、多数決で決めている。子どもは挙手をし、指名を受け、自分の意見を言うことで話し合いに参加している。2つの報告から、3歳児クラスの子どもにおいては、保育者が話し合いを進め、多数決で決める過程に、自分が作りたいものを言うことや複数の案の中から選ぶことで参加していることがわかる。

一方、5歳児クラスで同テーマでの話し合いを観察した結果（杉山，2008b・2009b）では、子どもは案を出すだけでなく、その案がよいとする理由やメニューを決める際の基準についても発言している。また、子どもが理由をあげて「譲る」ことを提案し、それを受けて意見を変えることもある。話し合いを進行しているのは保育者であるが、3歳児クラスに比べると意見表明の内容に広がりが見られ、合意形成に向けての意見の交換や他者の意見をも考慮した調整がなされていると言える。

では、間に位置する4歳児クラスではどのような話し合いの展開が見られるであろうか。本研究では、同テーマでの話し合いを4歳児クラスにおいて観察し、合意形成に向けた意見の交換や他者の意見を受けての調整がどのように見られるかを明らかにしたい。

ここで、4歳児クラスの子ども同士での合意形成について、保育実践を通して検討しておく。千葉（2010）は保育園の4歳児クラスで子どもが2人1組で1冊の絵本を選ぶことを当番活動として取り組んだところ、どの組も絵本を2冊もってくるが続いたと言う。ようやく1組が1冊だけを選んできたとき、どのようにして選んだのかをみんなの前で聞くと「○○チャンガ コレガイイッテイウカラ。ホントハ ○○ハ コッチガイイッテ イッタングケド、ソッチモ オモシロソウダナッテオモツカラ」と答える。その後、急に2人で1冊を選ぶ子どもが増えだしたということである。この実践は、4歳児クラスの子どもにとって、子ども同士での合意形成は容易ではないが、不可能ではないことを示している。また、1冊を選ぶ組が増えた背景として、自分の意見を主張するばかりでなく、相手の意見を聞いて自分の意見を調整することにより合意に至った経験が提示されることで、合意を形成するという目標や合意形成の仕方が理解されたことが考えられる。このことから、4歳児クラスの子どもたちは、意見を表明するだけでなく、合意形成を目標として自分の意見を調整することができると推測される。

次に、クラス全体での話し合いについての先行研究を見てみる。野呂ら（1999）が、保育園の4歳児クラスでの話し合いを観察し、話し合い活動の展開過程における保育者-子ども関係を分析したところ、保育者が話し合いの全過程をことばですじみちを立てながら導いていたと言う。このことから、4歳児クラスの話し合いは保育者の働きかけがあって成り立っていると考えられる。

そこで、本研究では、保育者の働きかけとの関連で合意形成過程を分析する。本研究の目的は、幼稚園の4歳児クラスにおいて毎月同じテーマで行われる話し合いを年間の3つの時期において観察し、合意形成過程の変化を保育者の関わりとの関連で明らかにすることである。中でも、合意形成に向けた意見の交換や他者の意見を受けての調整がどのように見られるかを明

らかにしたい。なお、話し合いのテーマは毎月の誕生会の前後にクラスで取り組まれるおやつ作りのメニューを決めることである。

<方法>

1. 対象

観察の対象としたのは、幼稚園の4歳児クラスの子どもと担任の保育者である。クラスの子どもの人数は21名である。表1に、話し合いに参加していた子どもの人数と月齢を時期ごとに示した。

表1 話し合いに参加した子どもの人数と月齢

時期	5月	11月	2月
人数(男:女)	19人(9人:10人)	19人(9人:10人)	16人(7人:9人)
平均月齢	55.7ヶ月	61.3ヶ月	64.8ヶ月
月齢の範囲	50ヶ月～61ヶ月	55ヶ月～67ヶ月	59ヶ月～70ヶ月

2. 日時

観察日は、2007年5月28日、29日、11月15日、2008年2月28日である。時間は、午前11時頃に始まるクラスの集まりの中で行われる話し合いの時間である。

3. 場所

場所は対象としたクラスの保育室である。

4. 場面

クラスで取り組むおやつ作りのメニューを決める話し合いの場面である。保育者とメモ用のボードを正面にコの字型に並べられた椅子に子どもたちが着席している。

5. 手続き

2台のビデオカメラで保育者と子どもたち全員が写るように撮影した。録画を再生し、話し合いの進行にかかわる保育者と子どもの言動を書き起こして分析の資料とした。

<結果>

1. 話し合いの時間と流れ

5月の話し合いは2日に渡って行われ、時間は、1日目が25分32秒、2日目が20分23秒で、計45分55秒であった。11月と2月は1回ずつで、時間は11月が35分10秒、2月が22分11秒であった。

いずれの時期も話し合いの進行役は保育者である。保育者はテーマ（おやつ作りのメニューを決めること）を提示し、子どもたちに案を募り、出された案の中から1つに決めていく流れをつくっていた。図1に、各時期の話し合いの流れを保育者の働きかけの系列として示した。なお、同じ働きかけ（例えば、1案を削る提案・宣言をする）が連続する場合でも、対象とする案が異なる場合には分けて記した。

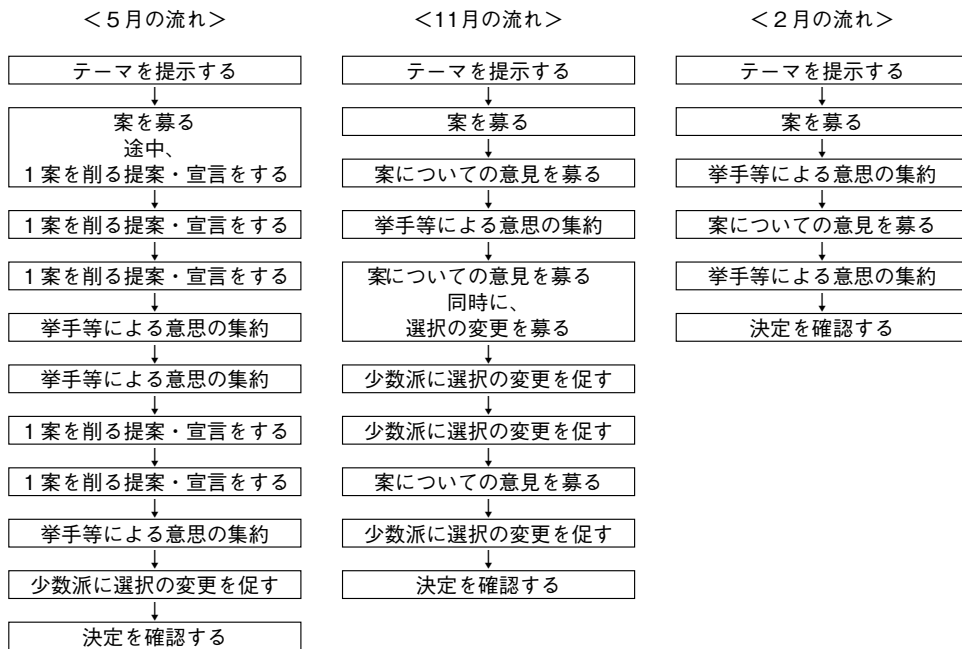


図1 各時期の話し合いの流れ

2. 合意形成の過程

(1) 案が削られる状況

各時期とも子どもから出された案は10個であった。1つの案に決まる、すなわち合意形成までに9個の案がどのように削られていったのかを表2に示した。

案が削られる状況は、保育者の関わり方により、4つのタイプに分けられる。1つには、複数の案の中から子どもが1人1つを選んだ結果、選択者がゼロになった案を削るという事態である。2つ目は、保育者が選択を変えてもよいと発言した後であるが、子どもが自発的に選択を変えることにより、選択者がゼロになる案がでてきて、その案を削るという事態である。3つ目は、保育者が少数派の子どもに多数派の案への意見の変更が可能かを問いかけ、子どもが応じることにより、その案の選択者がゼロになり削るという事態である。なお、選択者がゼロの案は削るというルールは、選択の意思表示をする前と、ある案の選択がゼロとわかった時点で、保育者の問いかけにより確認されている。4つ目は、特定の案を削る意見を保育者が提示し、それを子どもが受け入れて削られる事態である。表3には、各時期、子どもから出された10案中9案が削られていく状況を分類した結果が示されている。

表2 案が削られていく経過

時期	案が削られる状況	案数の変化	
五月	一 日 目	子どもから出された10案目について、保育者が季節を待った方がよいと言う。その意見を子どもが受け入れて、1案が削られる。	10→9
		先月作ったので他のを作るという保育者の意見を子どもが受け入れて、1案が削られる。	9→8
		他の案と合体する、という保育者の意見を子どもが受け入れて、1案が削られる。	8→7
		7案について挙手等で選択者を調べると、2案が選択者ゼロで削られる。	7→5
		1回目の挙手で手をあげていなかった子どもがいたことがわかり、5案について挙手等で選択者を調べると、1案が選択者ゼロで削られる。	5→4
	二 日 目	調理に危険が伴うという理由で1案を削るという保育者の判断に子どもが同意し、削られる。	4→3
		1案は昨年度作ったので他のものを作ることにして削るという保育者の提案に子どもが同意し、削られる。	3→2
		2案について選択者を調べ、少なかった方の子どもに保育者が多い方に移動（選択を変更）してくれるかを問うと、9名中7名が移動の意思を表明する。保育者が残り2名に多い方の案にしてよいかを尋ねると1名はダメと言ひ、もう1名はよいと言う。ダメと言った1名も保育者の働きかけで多い方の案に同意し、1案が削られる。	2→1
		子どもから出された10案について挙手で選択者を調べると、1案が選択者ゼロで削られる。	10→9
十一 月	移動してもよい（選択を変えてもよい）という保育者の発言の後、13名が自発的に選択を変え（内、3名は2回変え、のべ16回の変更）、5案が選択者がゼロになった時点で削られる。	9→4	
	選択者が1名の案について、保育者が変更を働きかけ、子どもが受け入れた結果、1案が削られる。	4→3	
	選択者が一番少ない案を選んだ3名一人ずつに、保育者が他の2つへの変更が可能かを聞いていくと3名とも変更し、その案が削られる。	3→2	
	他児から否定的な意見が出され、選択者も少ない案を選んだ6名に、保育者がもう一方の案に変更できるかを問うとできるという答えて、その案が削られる。	2→1	
	二 月	子どもから出された10案について挙手で選択者を調べると、6案が選択者ゼロで削られる。	10→4
意見交換の後、挙手で選択者を調べると、他児から否定的な意見が出されていた3案が選択者ゼロで削られる。		4→1	

表3 案が削られる状況の分類

観察時期		5月	11月	2月
子どもから出された案の総数		10	10	10
状 況	各案の選択者を挙手等で調べると、選択者がゼロである	3	1	9
	意見交換中の自発的な変更により選択者がゼロになる	0	5	0
	保育者の働きかけによる変更で選択者がゼロになる	1	3	0
	保育者の意見による	5	0	0

注) 数字は案数を示す。

(2) 各時期の合意形成過程の特徴

表2、表3に示された結果に事例の記述を加えながら、各時期の合意形成の過程の特徴を見ていくことにする。

1) 5月の特徴

5月は子どもから出された10案の内、半数の5案が保育者の意見で削られている。最終的には、残った2案の内的一方を選択している子どもに対し、保育者から選択の変更を促す働きかけがあり、子どもが応じることで1つに決まっている。その時の様子を事例1に記す。なお、5月には保育者が子どもに案についての意見を募ることはなかった。

[事例1] 保育者の働きかけで1つに決まる

保育者が残った2案について「〇〇がいい人、立ってください」と言うと、19名中、10名がホットケーキ、9名がチョコバナナに立つ。保育者は決定的な差はないと言いつつ、チョコバナナを選んだ子どもたちにホットケーキが多かったことを伝え、「こっち食べたいんだけど移動してくれるって人いますか。ほく、ホットケーキも好きだから、今回はホットケーキでもいいよって言う人？」と問いかける。挙手をした子どもを指名し、やりとりをしながらチョコバナナからホットケーキに移動(変更)する意思を聞きとる。このやりとりを7名の子どもとくり返し、「あとはいいかな？」と移動が終わったことを確認する。

保育者は、どちらの作りたい気持ちもわかるが作れるのは1つであること、おやつ作りはこれからもできること、今回譲ってもらった人たちは今度は譲る気持ちを持ってるとよいことを話す。その後、チョコバナナの2人にホットケーキも食べられることを確認し、「じゃ、A子ちゃんとB男君はホットケーキになってもいい？」と問うと、B男はダメと言ひ、A子はよいと言ひ。B男のダメな理由が食べたいからというのに対し、保育者が他児もホットケーキを食べたい気持ちであることを伝えるとB男はうなずく。A子も移動しB男が1人だけになったこと、みんなはホットケーキがよいことを保育者が伝えて、「今回はまんできる？」と問うとB男はうなずく。ホットケーキでもよいかという問いにもうなずき、5月のおやつはホットケーキに決まる。

2) 11月の特徴

11月は半数の案が自発的な変更により選択者がゼロになり削られている。また、事例2～4に見られるように、少数派の子どもに対し、選択の変更が可能かを問う保育者の働きかけに子どもが応じることで3案が削られ、1案に絞られていく。

保育者は案についての意見を募る働きかけを3つの場面で行い、子どもから意見が出ている。1回目と2回目の様子を事例5と事例6に記す。3回目は事例4に記した通りである。

[事例2] 選択者が1人であることを告げられ、変更するかと問われて変える

自発的な移動(変更)により5案が削られた後、保育者が、「あとはクッキーが1人なんですけれども、1人のC子ちゃん、何か移動しますか。クッキーが1人しかいないんですけど他に食べれるの、ポップコーンかドーナツかカレーだったらどれが好き？」と問うと、C子は「ポップコーン」と答えて移動し、クッキーが削られる。

[事例3] 選択者が少ないことを伝えられ、変更が可能かを問われて変える

クッキーが削られた後の選択者は、カレーが3名、ドーナツが4名、ポップコーンが12名である。保育者はそれぞれの作り方や味等について話をした後、カレーを選んだD男に、カレーは年少児も年長児も作っているがどうしようかと語りかけると、D男がうなずく。保育者が「カレーチームはちょっと少ないから、カレーチームはドーナツかポップコーンに移動することはできますか?」と言うと、カレーを選んだE子が「できる」と言う。保育者が一人ひとりにドーナツとポップコーンのどちらがよいかを聞いていくと、2名はポップコーンを、1名はドーナツを選び、カレーが削られる。

[事例4] 否定的意見を向けられた少数派が変更が可能かを問われて変える

ドーナツとポップコーンのどちらかに決めるにあたり、保育者は、…だから〇〇がよいとかやめた方がよいという意見のある人は出すように言う。一人の子どもが、ドーナツは前、年少組が作ったからやめた方がよいと言い、もう一人が、ドーナツはやけどするからやめた方がよいと言う。保育者は「そう聞くと、ドーナツチームどうですか」と言い、ドーナツを選んだ子どもを確認し、「ポップコーンも食べれる?」と聞く。さらに、ポップコーンに移動できるかと問うと、3名は「できる」と答える。他の2名には個別に問いかける。「ポップコーンの方が人数が多いから、ポップコーンに移動できますか?」と問いかけられた最後の1名が「できる」と答え、ポップコーンに決まる。保育者の提案で移動した子どもに味付けを決めてもらうことになり、保育者に問いかけられて一人ひとりが好きな味を言う。

[事例5] 保育者の方向づけに添った意見が出される

出された案の中にカボチャを使った料理があることについて、保育者がハロウインの時も作ったがよいのか、「またカボチャ」という人はいないかと問う。それを受けて子どもから、「…ハロウインの日の方がカボチャは楽しいから」という意見が出される。保育者が重ねて、ハロウインでカボチャを使った料理をしているからもう1回カボチャでよいのかと思ったということ話す。みんながどうしても食べたいのなら入れてもよいがみんなはどう思うかと問いかけ、カボチャを使った料理をあげた2名を確認する。その後、挙手で賛成の意思を集約すると、その2名は他の案を選ぶ。ただし、他の子どもが選んだため、カボチャを使った案は残る。

[事例6] 賛成者が一番多いドーナツにしようという意見が出される

保育者が挙手で賛成の意思を集約した結果をそれぞれの案の選択者数を言って確認する。その後、こうした方がよいとか、これはこうだから今度にした方がよいとかいう意見はあるかと問うと、ドーナツを選んだ子どもから、選択者が一番多いからドーナツにしたらよいという趣旨の発言がある。保育者は子どもの意見を全体に伝えながら、確かにドーナツも多いがパフェの選択者も同数いると言う。

3) 2月の特徴

2月は2回の挙手等による意思表示により決まっている。事例7に記した通り、保育者の働きかけで、残っている案についての意見交換を経た後、2回目の意思表示を行い、1つに決まっている。

[事例7] 否定的な意見の出された案の選択者がなく、1つに決まる

保育者がクッキー、パフェ、スイートポテト、シャーベットの4つから決めることでよいかを確認し、それぞれを絵にする。「この4つから決めたいと思います。ただ、今は寒い冬だから季節のこととかも考えて決められるといいね」と言い、子どもたちに意見を募る。3人の子どもから、シャーベットは冬だから食べるとおなかがいたくなるかもしれないという意見、パフェは冷たいものだからあまり食べない方がよいという意見、クッキーは家でも食べられるから消した方がよいという意見が出る。保育者はこうした意見を聞いて選択を変えてもよいと言った後、「クッキーがいい人、手を挙げてください」等、4つについて順に聞いていく。クッキー、パフェ、シャーベットへの挙手はなく、全員が立つ等で賛意を表したスイートポテトに決定する。

<考察>

1. 案がしぼられていく過程における保育者の関わり

3つの時期とも子どもから10案が出され1案にしぼられていったが、その過程は保育者の関わりの点で大きく違っていた。

5月には保育者の意見で半数が削られ、最後まで選択の変更を促す働きかけがあり、1つに決まっている。保育者が案をしぼる方向での具体的な提案をし、子どもが応じることで、結果として合意が形成されていったと言えよう。

11月には保育者の意見による案の削減は見られない。保育者の働きかけに応じた自発的な変更の結果として半数の案が削られ、少数派の子どもに選択の変更が可能かを問う保育者の働きかけで3案が削られている。子どもの自発性や意思を尊重する形ではあるが、案が次第に削られていく方向での保育者の働きかけに子どもが応じて意見を変えることで合意が形成されていく。

2月には保育者の意見や選択の変更を促す働きかけは見られない。1回目の意思の集約の後、意見交換をして2回目の意思の集約をすると、意見が1つに集中しているという流れである。しかし、保育者の働きかけで行われた意見交換が結果として合意形成に影響を及ぼしたと考えられる。否定的な意見を向けられた案の賛成者がその後の挙手等による意思の集約で意見を変えているからである。

以上のような3つの時期の合意形成過程をたどると、保育者が案を削る方向での具体的で直接的な働きかけを行うことで案がしぼられていく過程から、子どもの自発的な意見の変更を尊重しつつも変更を促す働きかけがあることで案がしぼられていく過程へ、さらには意見交換の場をつくることで自発的な意見の変更が促され、案がしぼられる過程へと推移している。保育者の働きかけがより間接的になる一方、子どもがより自発的積極的に合意形成過程に関与するようになっていくことがわかる。

2. 合意形成に向けた意見の交換と他者の意見を受けた行動の調整

5月には出された案についての意見を募る保育者の働きかけは見られず、子どもから自発的に意見が出されることもなかった。したがって、他児の意見を受けての選択の変更は確認されなかった。一方、保育者の意見を受けた選択の変更が見られる。また、少数派の子どもが選択

の変更を促す保育者の働きかけに応じるという形での調整も見られる。

11月には、保育者から前に使ったことのある材料での料理への反対意見を募る働きかけがあり、それに呼応する子どもの発言があった。その後の意思の集約で該当する案を出していた2名は選択を変えており、保育者や他児の意見を受けた変更の可能性がある。一方で、別の案を出していた子どもが当該の案に賛成している。当該の案を出したことを確認されて意見を伝えられた2名と他の子どもとは、意見の受けとめ方が違っていることが考えられる。保育者はどうしても食べたいのなら入れてもよいと言っているが、案を出した2名は発言全体から否定的な意味合いを受けとったものと推測される。

また、事例6の通り、賛成者が多いある案に決めようという意見が出されるが、他にも同数の賛成者がいる案があるという保育者の応答でやりとりが終了しており、その意見の他児への影響は確認できない。

11月の話し合いの最後は、少数派の子どもが意見の変更が可能かを問う保育者の働きかけを受け入れることで合意が成立しているが、それに先立つ意見交換で、少数派の案について否定的な意見が出されている。保育者は少数派に対し、その意見を聞くとどうかと問いかけながら、変更が可能かを尋ねている(事例4)。この場合、他児の意見と保育者の働きかけとが重なって、選択の変更に影響した可能性がある。

2月の話し合いの最後は、意見交換で否定的な意見が出された3案が、その後の意思の集約で賛成者がなく削られている。3案に賛成していた子どもたちが選択を変えた理由を尋ねてはいないので確実ではないが、他児の意見が選択の変更に影響した可能性は高い。保育者は個々の案についての意見は述べていないが、意見交換に先立ち、「今は寒い冬だから季節のこととも考えて決められるといいね」と発言している。これが「冬だから…」「冷たいものだから…」という子どもの意見を引き出し、間接的に子どもの選択の変更に影響を及ぼしたことが考えられる。

以上、見てきたことから、4歳児クラスの話し合いにおいて意見交換が見られるかどうかは、保育者が意見を募るかどうかによるところが大きいこと、また、意見を募る際の言葉かけの内容が子どもの意見の内容に影響することが考えられる。このように、保育者の働きかけに大きく依存しながらも、4歳児クラスの子どもたちは、合意形成を目標として意見を言うことができることが示された。また、他者の意見を受けた行動の調整については、保育者の進め方に依存してはいるものの、保育者の意見を受けた行動の調整だけでなく、他児の意見を受けた行動の調整が可能になっていくことが示唆された。

子どもから出された意見は、賛成多数だからある案がよいという意見を除けば、それぞれの案について否定的な内容であった。いわば反対意見である。佐藤(2010)は、3歳後半児、4歳後半児、5歳後半児を対象とした実験で説得能力の発達について検討した結果、3歳後半児は他者の反対理由には着目せず、自己の持つ信念に注目していること、4歳後半になると他者の反対理由に着目し、5歳後半になるとより他者の反対理由に着目するようになることが明らかになったとしている。反対意見を受けて選択を変更する背景には、他者の反対理由に着目できるようになるという発達が関与していることが考えられる。

<文献>

- 1) 野呂アイ・杉山弘子 (1999) 幼児の話し合い活動について IV - 4 歳児の話し合い場面における保育者 - 子ども関係 -. 尚綱女学院短期大学研究報告, 第 46 集, 23-30
- 2) 佐藤友美 (2010) 子どもは自己の欲求を抑えて他者の反対理由に着目できるか - 子どもの説得能力の発達 -. 日本発達心理学会第 21 回大会発表論文集, 390
- 3) 杉山弘子 (2008a) 3 歳児クラスでの話し合いへの幼児の参加. 日本発達心理学会第 19 回大会発表論文集, 528
- 4) 杉山弘子 (2008b) 話し合い場面での幼児の行動の変化と発達の意味 - 幼稚園 5 歳児クラスの話し合いの分析から -. 尚綱学院大学紀要, 第 56 集, 99-109
- 5) 杉山弘子 (2009a) 3 歳児クラスでの話し合いへの幼児の参加 (2) - 集団および進め方が異なる事例の分析 -. 日本発達心理学会第 20 回大会発表論文集, 120
- 6) 杉山弘子 (2009b) 話し合い場面における幼児の行動の変化 (3). 日本教育心理学会第 51 回総会発表論文集, 199
- 7) 千葉直紀 (2010) 二人組から始まる集団づくり. 全国保育問題研究協議会編集委員会編『季刊保育問題研究』242 号, 新読書社, 89-92
- 8) 礪波朋子 (2003) 幼児同士の共同意思決定パターンの分析. 日本発達心理学会第 14 回大会発表論文集, 416

<付記>

本論文はその一部を下記の通り、日本発達心理学会第 21 回大会において発表している。

- ・ 杉山弘子 (2010) 4 歳児クラスでの話し合いにおける子どもの意見の変化. 日本発達心理学会第 21 回大会論文集, 538